

世界遺産候補の地元における 観光客受け入れ体制 ～佐世保市黒島町～

はじめに

長崎県は、今年（2015年）が『明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域』、翌2016年には『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』の世界遺産登録可否の決定^{*}が2年連続して控えており、空前の観光ブームが興る可能性がある。このため、構成資産のある地域には多くの観光客が訪れることが予想されることから、事前にその受け入れ体制を構築しておくことが肝要となる。

そこで、本稿では『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』を構成する資産の1つ「黒島天主堂」のある佐世保市黒島町での動きについてレポートする。

^{*}イコモス（国際記念物遺跡会議）の勧告を受け、ユネスコ（国連教育科学文化機関）の「世界遺産委員会」にて決定される。

I. 黒島について

1. 概要

佐世保市黒島町は、九十九島の島々のなかで最大の面積（4.62km²。周囲は12.5km）を誇る離島である。島の北側はなだらかに傾斜しており、南側は断崖絶壁となっているが、その中央部は比較的アップダウンの少ない平地となっており、ここに市役所の支所や教会など主要施設が集中している。島へのアクセスは、佐世保市の相浦港から高島経由のフェリーで約50分、1日3便が運航されている。



※佐世保観光コンベンション協会発行のリーフレットより

2. 産業

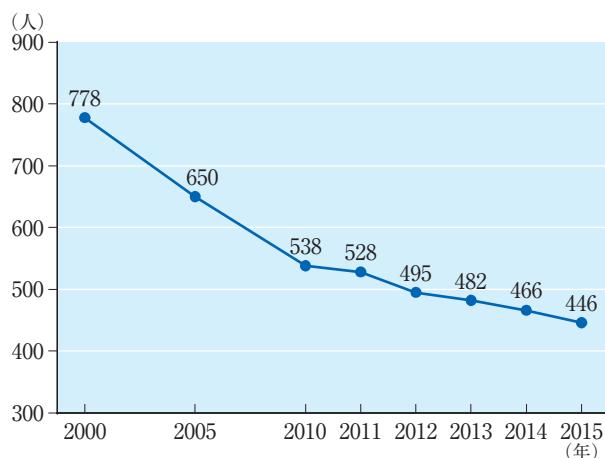
かつては焼酎の原料となるさつまいもの栽培が盛んであったが、輸送コストの問題から焼酎の製造元が島から芋を購入しなくなり、次第にその栽培量が減少、さらに近年は、従来棲息していなかったイノシシによる被害も拡大しており、農家は自家消費程度の量しか栽培しなくなった。このため、漁業が産業の中心となるが、漁獲量の激減や跡継ぎ不在といった業界を取り巻く厳しい環境はここ黒島も全国同様であり、数十年前からは、港湾関係の仕事で関西方面に出稼ぎに行く人も増えてきている。

他には、かつて小規模ながら肉牛を生産していた時代の名残から、現在も子牛のみ生産・出荷している農家が5軒、また、墓石需要の減少から低迷している特産品「黒島御影石」を取り扱う石材業者が1軒、それぞれ残っている。

3. 人口

島には高校がなく、中学を卒業すると島外へ出なければならない。また、前述のように、仕事の選択肢がない島に戻って暮らすには漁業を継ぐしかなく、若者のUターンをさらに躊躇させている。これが主因となり人口が急激に減少（図表1）、また、高齢化率も佐世保市全体のそれを遙かに上回っている（図表2）。

図表1 黒島の人口



図表2 黒島の高齢化率



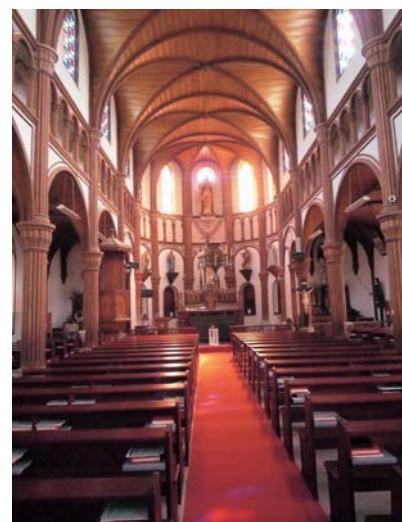
※図表1・図表2 共に2000～2010年は国勢調査、2011年以降は住民基本台帳を基に当研究所にて作成

4. 歴史的背景

黒島は、室町時代後期から戦国時代初期にかけて松浦氏により治められていたが、江戸時代になると平戸藩の所領となった。また、同時代の後期に、幕府のキリスト教弾圧から逃れたキリストian^{そとめ}が長崎市の外海地方や五島列島などから移住し、その信仰を密かに守り続けたという歴史から、現在でも島民の約8割はカトリック信者である。

II. 世界遺産登録候補：黒島天主堂

黒島に着任したフランス人のマルマン神父が設計し、1900（明治33）年に着工、信徒らの手により2年後の1902（明治35）年に竣工したのが黒島天主堂である。当時としては非常に大規模なレンガ造りで、祭壇部分には有田焼のタイルが敷かれており、マルマン神父手作りの説教壇、神父が母国から取り寄せた創建時からの鐘も残っている。1998年、長崎県では国宝・大浦天主堂に次ぐ国の重要文化財に指定された。



黒島天主堂とその内部

III. 観光客の受け入れ

1. 黒島史跡保存会の結成

1988年4月、黒島に公民館が竣工し、その職員に就任（現：館長）したのが、島外で10年間の教員生活を経た地元出身の山内一成氏である。翌1989年、山内氏は「島が活気づくためにも夏祭りや運動会などといったイベントを開催・運営できる組織が必要だ」と島内に呼びかけ、女性による「黒島婦人会」と若手中心の「黒島青壮年会」の結成を促した。そうして、島民のなかに人をもてなす気持ちを醸成させていった最中の1998年、黒島天主堂が国の重要文化財に認定された。

天主堂の重要文化財認定は、これまで釣り客しか来なかった黒島に観光客を呼び込むことになった。観光客から天主堂の説明を受けたいとの要望が強くなってきたことから、山内氏は佐世保市教育委員会社会教育課と協力して観光ガイドの募集を行い、6人の島民がそれに応じた。こうして重要文化財認定の翌年1999年9月、島内で民宿を営む鶴崎時雄氏を代表に、山内氏を含む島民7人からなる黒島初の観光ガイド組織「黒島史跡保存会」（現代表は大村正義氏）が結成された。

2. 史跡保存会の活動

志高く集まった史跡保存会のメンバーであったが、観光については全員素人であり、まずは黒島についての知識を身につけようと、重要文化財認定を目指して数年間天主堂の調査に携わったことで島の歴史にも詳しい^{*}公益財団法人日本ナショナルトラストと佐世保市社会教育課に対して、それぞれ勉強会の講師を依頼し、ガイドとしての知識を深めることにした。

ところが、ガイドへの需要が増えてきたことから、知識が不十分なまま先行してガイドを始めることになった。メンバーは、教会の建築様式など専門的な事柄がよくわからないままのガイドデビューとなつたが、自分達自身がカトリック信者であることが幸いし、教会に関連する歴史やキリスト教の作法等については詳しく、これらの知識を観光客へ披露しながらガイドとしての経験を積むことで、自信を深めていった。

^{*}国民的財産である美しい自然景観や貴重な文化財・歴史的環境を保全し、利活用しながら後世に継承していくことを目的として、英國の環境保護団体である「ザ・ナショナルトラスト (The National Trust)」を範に1968年12月に設立された団体。

黒島史跡保存会による観光コースは以下の通りであり、民家に委託した体験コース（特産品づくり）も用意されている。

黒島の観光コース

1日コース（ガイド料：1人あたり500円）		フェリーの1便で島を訪れて、最終便で帰るコース。ほぼ全島を案内可能。
半日コース（　　〃　　）		フェリーの2便で島を訪れて、最終便で帰る正味1時間半のコース。島の主要箇所のみ案内。
体験コース (特産品作り)	黒島どうふ	海水で豆乳を固めて作る豆腐。体験料：1人2,500円
	黒島ふくれまんじゅう	「クワッカラ」という葉っぱにのせて蒸すまんじゅう。体験料：1人1,500円

※NPO法人黒島観光協会より聴取し、当研究所にて作成

「黒島どうふ」づくり



黒島ふくれまんじゅう

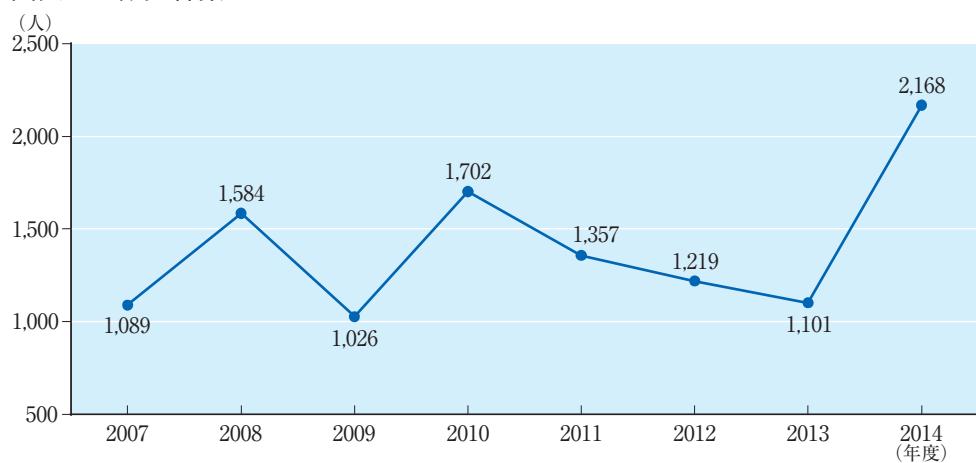


※共に佐世保観光コンベンション協会発行のリーフレットより

3. NPO法人黒島観光協会の設立

史跡保存会の活動が評判を呼び、黒島は毎年増減はありながらも平均約1,300人が訪れる島となった。ところが、2014年に『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』がわが国の世界遺産推薦候補に選定されるとその数が一気に増し、同年は2,000人以上が訪れた（図表3）。

図表3 観光客数



また2016年は、教会の世界遺産登録が控えていることから一段と多くの観光客が訪れることが容易に予想される。ところが、これまで受け入れの中心を担ってきた黒島史跡保存会のメンバーの中には、体調面などからリタイアする人も出始めており、現在は3人で活動している状態となってしまった。このような状況への危機感から、山内氏は新たなガイドを発掘しようと、自らが講師を務める「観光ガイド養成講座」を2014年3月10、11日の2日間にわたり開講した。すると、島民のなかから新たに30～50歳代の男性5名、女性9名の受講生が現れた。

そしてもう1人、この状況に危機感を持った人物が、佐世保市立総合病院黒島診療所の医師・羽田野和彦氏である。羽田野氏は、自らが動いて2014年4月にくろしま・ブルーツーリズム協会を結成するとその代表に就任。次いで小値賀町に赴くと、同町の観光を牽引している（株）小値賀観光まちづくり公社の高砂樹史専務に観光客の受け入れについて相談し、2014年6月にはその高砂氏を黒島に招聘、小値賀町での成功体験を黒島の島民に向けて語ってもらうなどの活動を行った。

これらの動きを踏まえて、山内氏と羽田野氏は「これまでの黒島観光は、黒島史跡保存会という民間団体中心だったが、これでは行政からの支援も限界がある。これからは観光客を受け入れるきちんとした組織を作つおかないと、世界遺産登録後の増加する観光客へ対応できない」と考え、観光ガイド講座の受講生14人と、島の将来に危機感を持つ島民有志による、NPO法人設立準備委員会を発足させた。

世界遺産への登録を翌年に控え、まず法人資格の取得を先行させることとし、（公財）佐世保

観光コンベンション協会の協力を得て、2014年12月に山内氏の自宅を仮の事務局とした賛助会員を含む55名からなる「NPO法人黒島観光協会（理事長は山内氏）」の認証を受けた。黒島観光協会は、黒島史跡保存会からステップアップし、観光客の経済活動により黒島の住民に経済的恩恵が受けられるよう活動することを主目的としている。

4. 黒島観光協会への期待

NPO法人の設立により、観光関連の事業に加えて島内の環境保全など、島の様々なことに対応することが可能となった。また、観光の中心・黒島天主堂に対しては、NPO活動から得た収益の一部を教会の維持・管理費として還元することも検討されている。

法人組織には、民間組織と比べて行政などからの支援を得やすいというメリットがある一方、広報活動などその運営には自助努力が求められていることから、多くの島民の支持が不可欠となる。黒島観光協会では、会員数を現在の55人から島の世帯数並みの280人まで増やしたいとしており、観光による経済的恩恵に懐疑的な島民のためにも、観光業を中心とした具体的な活動内容を早急に示すことで、島全体における世界遺産登録に向けた機運を高めていくことにしている。

IV. 黒島観光の課題

1. 観光メニューなどの策定

これまでの黒島観光では、黒島史跡保存会が観光客から依頼がある時のみ対応してきたが、これからは、観光協会で史跡保存会時代に培ったノウハウを生かしながらの常時対応となる。また、ガイド料金は史跡保存会時代に各コース関係なく1人当たり500円で請け負っていたが、これからは法人手数料を上乗せし値上げせざるを得ないなか、観光客の満足度に見合う金額を設定しなければならない。

この他にも、海洋クルージングやウニ割り体験など新メニューの作成、農産物の販売、土産品の開発とその販売など、取り組むべき課題が多数あるなか、その進捗状況は、各観光コースの料金設定の検討にとどまっており、まだこれからの状態である。

2. ガイドの現状

新ガイドの育成は、2015年から活動することを目標に山内氏が行っているが、知識学習のみにとどまっており、実習はまだ行われていない。早い段階での1人立ちを目指しているものの、現状では観光客の受け入れに一抹の不安がある。

ただし、黒島を訪れる手段はフェリー1隻しかなく、訪れる人の数は自然と限られる。観光協

会では、フェリーに車両を1台積載すると最大約150人の乗船となることから、島民の乗船も加味して、島を訪れる観光客数は多くても150人以下、実際には100人前後になるのではと推計している。それでも1ヶ月3,000人、年間36,000人の来島者となり、ガイドが足りない状況に変わりはない。観光ガイドによる説明は、ガイド1人当たり観光客10人前後がベストといわれ、それぞれが別の本業を抱えている講座受講生14人全員がガイドになって何とか充足できる状況である。観光協会としては、土・日曜日だけでも構わないので、講座の受講生全員がガイドになってくれることを望んではいるものの、山内氏が2015年もガイド講座を開講したい旨を観光協会の会員55名との意見交換会の場で表明したところ、皆の反応はいまひとつで先がまだ見えてきていない。

3. 島内宿泊事情

黒島での宿泊は、「民宿つるさき」「喜久屋旅館」「山下旅館」の旅館3軒、計40名が限界であり、キリスト教関連遺産の世界遺産ということで、日本の旅館を好む外国人観光客が大勢来島してきた場合には、言葉の面も含めてそのニーズに応えることが難しい。また、フェリーの運航会社も、仮に本土側発黒島行きの初便が満席となると、2便目の乗船客の調整を行い、夕方に島から戻る最終便の定員オーバーを防ぐなど、対応策をとることにしている。

船の定員と観光客の来島時間・帰島時間が把握できる黒島は、比較的観光客対策を行いやすい地域であり、「10人の宿泊客よりも100人への食事を」など、当初は日帰り観光客が主なターゲットとなろう。

4. 島内交通手段

黒島観光の大きな課題の1つが島内交通手段である。現在、島を巡る公共交通機関は何もなく、観光客はマイカーやマイクロバスなどともにフェリーで来島するか、徒歩で島内を巡るしかない。教会観光には巡礼のような形で訪れる高齢の信者も多く、そのような人達に徒歩での観光は厳しい。

そこで黒島観光協会では、レンタカーの業務代行のような形で観光協会が紹介手数料収入を得られるような仕組みを検討している。また、個人客へは2015年度からレンタサイクルの貸し出しを行う予定である。

5. 天主堂の維持・管理

黒島天主堂の維持・管理も重要な課題である。かつて島内に6箇所あったカトリックの集落は、人口減と高齢化から2015年4月現在、3箇所と半減しており、各集落の持ち回りで行われてきた清掃活動など、一連の教会維持活動への当番周期が3ヶ月に1度と短くなるなど、信徒への負担

が次第に大きくなっている。なお、これらの活動財源は、信徒1世帯毎に月々徴収する維持・管理費によって賄われている。

また、天主堂には増加する観光客から教会を守るために、2人の「^{きょうかいもり}教会守」が配置されている。「教会守」はガイドではなく、観光客に教会見学のマナーを教えたり、教会を傷つけたりしないかどうか監視するなど、その名の通り教会を見守る役割を担っている。

6. 食事の問題

個人観光客が来島しても、黒島には気軽に食事できるところがないのも大きな課題である。食堂がないため3軒の民宿が頼りであり、団体客100人程度であれば対応が可能である。このうちの1軒は常設食堂を営んでいるものの、予約制となっている。これでは島内での消費増につながらず、外貨獲得のチャンスをみすみす逃すことにもなることから、少人数の観光客がいつ来ても食事のできる体制づくりが必要となる。

店側が最も懸念していることが、離島であるが故の食材ストック面のリスクである。そこで黒島観光協会では、凝った食事メニューを揃えるのではなく、まずは焼きそばやカレーなどといった手軽なメニューから対応できないかどうか検討を重ねている。

7. トイレの問題

各地の観光地でもよく挙げられるトイレの問題は、ここ黒島も例外ではない。現在、島内ウォーキングを行っている観光客は、コースの途中にトイレが全くないため、民家を借りているのが実情である。フェリー待合室にはトイレが設置されているが、多人数に対応しておらず、マイクロバス2台による観光客約40人の来島により発生するトイレ行列は、黒島における見慣れた風景となってしまっている。清潔なトイレは観光客の満足度にもつながるため、その整備が急がれる。

一方、天主堂の前には市が800万円をかけて立派なトイレを整備しているが、イコモスによる世界遺産の下見が行われた際、世界遺産候補の目の前に公衆トイレがあるのは芳しくないと指摘を受けており、これについては今後の検討課題となっている。

おわりに

人口の減少と高齢化の進行により、地域の活力が徐々に失われつつあるなか、黒島にとって天主堂の世界遺産登録は最大のチャンスである。世界遺産のある離島のなかで、黒島は比較的穏やかな海を隔ててフェリーで約50分と訪問しやすい島であり、同じ行政区でありながら島を訪れたことのない本土の佐世保市民の来島を促すことにもなろう。

これまでの黒島観光では、「観光客は教会を観て帰るだけ」という意識もあって、島内で消費してもらうことがあまりなかった。ところが今回、NPO法人の設立により、この問題に本格的に対処することができる体制が整ったことで島民の観光への関心もこれまで以上に高まり、大勢の観光客が来島する状況を目の前にした島民のなかには、例えば民泊などを自主的に始める人が現れることも考えられる。

黒島には、同じ『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』の構成資産がある県内他地域だけでなく、世界遺産がある他の離島の手本となるような観光先進地の島となることを期待したい。

(杉本 士郎)